

黒部川ダム排砂評価委員会開催結果

1. 第13回黒部川ダム排砂評価委員会

●開催要件

- 開催日時 平成14年7月27日（土）10：00～12：00
- 会場 富山市於、「ボルフアート富山」4F「珊瑚の間」
- 出席者
- | | | |
|-----|------------|--------------------------|
| 委員長 | 高倉盛安 | 元富山県立大学短期大学部長（環境） |
| 委員 | 楠井隆史 | 富山県立大学短期大学部教授（環境） |
| | 鈴木満平 | 富山県水産試験場長（漁業） |
| | 竹内 章 | 富山大学理学部教授（海洋地質学） |
| | 田中 晋 | 富山大学教育学部教授（生物学） |
| | 藤井昭二 | 富山大学名誉教授（地質学） |
| | ※大熊 孝 | 委員（新潟大学工学部教授、河川工学） |
| | 安永義暢 | 委員（日本海区水産研究所長、水産増養殖） |
| | 広瀬慎一 | 委員（富山県立大学短期大学部長、利水工学） |
| | 本城凡夫 | 委員（九州大学農学部教授、水産増殖環境学）は欠席 |
| 顧問 | 柳田友道 | 東京大学名誉教授、富山大学名誉教授 |
| 事務局 | 北陸地方整備局河川部 | |
| | 関西電力㈱北陸支社 | |

●議 事

- 平成14年7月連携排砂の実施報告について
- ・連携排砂実施の経過及び状況報告
 - ・連携排砂前の5月定期調査（水質、底質）及び排砂中の河川と海域の水質調査結果報告

●委員の評価及び意見

【評価】

- ・現時点の速報値から見れば、問題となる現象は見られなかった。
- ・委員会としての評価は、環境調査結果がすべて出揃った段階で出すこととする。

【主な意見】

○平成14年7月連携排砂に伴う環境調査結果（速報）について

（委員）濁りについては、基本的にSS値で評価し、濁度は速報値用として参考的に使用することについては、了解している。今回、下黒部橋の濁度が高いのはなぜか。

（事務局）排砂中における濁り状況の把握については、SS値が現地分析できないことから、現地で測定可能な濁度により濁り状況を把握し、速報値として使用している。濁度計の測定レンジは500度までであり、測定レンジを超える高濁度の場合は、希釈して測定し希釈倍率を乗じている。使用した濁度計は透過光式であることから、細粒分が多いと光が吸収されやすく、値が大きくなったのではないかと考えている。

なお、希釈して測定した場合、測定誤差が大きくなると考えられることから、濁度は速報用の参考値として扱っている。

（委員）この問題については、SS粒度分析の結果も見必要がある。

（委員）宇奈月ダム直下では自然流下中は、風向きにより多少泥臭があったが、下流河川においてはほとんど臭気はなかった。

（委員）海域のSSとCODのコンター図については、作成範囲を調査範囲内に止めるべきである。

（事務局）調査範囲に応じたコンター図を作成する。

（委員）評価は、現在、調査分析の終了していない項目による生物への影響についての評価も必要であり、今回は、速報値を対象とした評価とするべきである。

○近隣河川との比較（SS及び流量）について

（委員）他河川との比較をするのならば、比較対照河川を黒部川近傍に位置し、かつ河口域の環境が黒部川と似ている河川の中から選定するのが好ましい。

（委員）他河川との濁りの比較については、各河川の特徴があるので、単純に比較できないのではないか。

（委員）他の河川がどのような状況であったのか、傾向がわかるので、参考として良い。

2. 第14回黒部川ダム排砂評価委員会

●開催要件

○開催日時 平成15年1月21（火）10：00～12：30

○会 場 富山市於、「名鉄トヤマホテル」3F「清風の間」

○出席者

委員長 高倉盛安 元富山県立大学短期大学部長（環境）

委 員 鈴木満平 富山県水産試験場長（漁業）

反町 稔 日本海区水産研究所長（水産増養殖）

竹内 章 富山大学理学部教授（海洋地質学）

田中 晋 富山大学教育学部教授（生物学）

広瀬慎一 富山県立大学短期大学部長（利水工学）

藤井昭二 富山大学名誉教授（地質学）

本城凡夫 九州大学農学部教授（水産増殖環境学）

※大熊 孝委員（新潟大学工学部教授、河川工学）

楠井隆史委員（富山県立大学短期大学部教授、環境）は欠席

顧 問 柳田友道 東京大学名誉教授、富山大学名誉教授

事務局 北陸地方整備局河川部

関西電力(株)北陸支社

●議 事

○平成14年7月連携排砂の実施報告について

- ・5月、9月定期調査結果（水質、底質、水生生物、地下水）及び連携排砂中における水質、底質調査の分析結果について報告

●委員の評価及び意見

【評価】

- ・平成14年7月連携排砂に伴う環境調査結果について審議したところ、特に問題となる現象は見られなかった。
- ・今後、中期的な環境の変動状況を見ていくこととする。

【主な意見】

○平成14年7月連携排砂に伴う環境調査結果について

(委員) 排砂との関係はなく、流域全体で考える必要があるが、出し平ダム貯水池の底質のT-Pについて、平成7年度から経年的に見ると上昇傾向にあるのではないかな。

(事務局) T-Pについては上昇傾向が認められる。この原因としては排砂の影響よりも上流から流れてきたものの影響が大きいと考えている。今後、黒部川全体の水質、底質のトレンドを整理して提示したい。

○河川水生生物調査結果について

(委員) 「6. 考察」(P.4)は現時点では妥当と考えられる。マハゼの平成8～10年の推移は、H7年大洪水等により、れき質の河床が砂質に変わったという一時的な環境の変化を示していると考えて良い。

(委員) 直接、排砂と関係ないが、マハゼ、カゲロウ、ユスリカ、クロロフィルaについて経年的に見ると、黒部川流域全体で何らかの変化があるようにも見え、富栄養化の問題も含めて考察する必要がある。

○海域水生生物調査結果について

(委員) 海域底質の粒度組成のコメント(P.4)で、「大きな変動は見られない」となっているが、どれくらいから変動傾向があると考えてなのか。表現を修正した方がいいのではないかな。

(事務局) 経年的に見ると、著しく増加あるいは減少というような変化は見られないという意味で記述したが、表現を修正する。

(委員) プランクトンの経年変化については、富山湾全体や日本海側全体の傾向を踏まえて議論しなければならないが、広域的な調査は難しく、現段階ではこのデータで判断せざるを得ない。

(事務局) 今回、食物連鎖の底辺にあるプランクトン、ベントスの経年的な変化と出水、排砂の関連性を見ようと整理したが、プランクトンについては、排砂によって大きな変化が見られないと考えている。

(委員) プランクトンについては、プランクトンの経年変化と出水及び排砂との関連性を調査した上で、評価すべき。

(委員) 生物調査全般について、調査時の天候など変動要因がわかるような形でデータを整理した方が客観的に評価できるのではないかな。海域調査のサンプリングの時期、回数、地点をもう少し詰めてほしい。

(委員長) 以前から、議論しているように排砂の海域への影響を直接把握できる生物調査を実施することは難しいことではあるが、各委員の意見を踏まえ事務局はサンプリングの時期等にさらに工夫を加えること。